

第 11 章

『ヘンリー・ライクロフトの私記』

(*The Private Papers of Henry Ryecroft*, 1903)



George Gissing by Elliott & Fry (May 1901)

作品の梗概

『ヘンリー・ライクロフトの私記』の全体の構成は、「春」、「夏」、「秋」、「冬」の 4 章である。春 (25)、夏 (27)、秋 (25)、冬 (26) の計 103 篇にわたるエッセイから成り立っている。イギリスの美しい四季を背景に、読む者の心に染みる様々な思いを綴ったものである。これまで、*The Private Papers of Henry Ryecroft* の版は多数あるが、有名な Phoenix 版の春、夏、秋、冬の始まる扉の部分には、四季の営みである農作業、収穫、冬支度などを暗示する挿絵が掲載されている。

簡単な解説はあるが、これほど有名な作品のまとめである梗概はほとんどと言っていいほど存在しない。エッセイという性格上、内容が多岐に渡るために、これだというものにはならないと思われる。いわば箴言と言える、折に触れたライクロフトの思いを導き出してみたい。

序文

ギッシングは、架空の人物ヘンリー・ライクロフトの友人を装い、ライクロフトが死んで、その遺稿を整理、出版する経過を踏まえ、次のように言っている。「ここには作者の自己が啓示されている。」この言葉は、出版されてから 100 年間のこの作品の評価と特徴を見事に言い当てていると思われる。期待してもいなかったほどの厚い友情をライクロフトに対して抱いていたある知人が死んで、年間 300 ポンドの終身年金が彼に遺贈されることになった。数週間の後には、それまで住んでいたロンドンの郊外から、彼がイギリス中で最も愛していた地方、エクセターの近くに田舎屋を構えた。「目で読むだけでなく、心で読む人にとって、少なくとも真率という点にかけて、価値がなくはないものができるのではないだろうか。」「選んだ内容を通読してみても自然の様々な状景のことが実にひんぱんにでてくるのに心をうたれた」と結んでいる。

本編

いくつかのトピック別に分けてまとめてみたい。

1. 自然

この随筆の重要なテーマと言ってよい話題である。「偉大な芸術家である自然は、ありふれた花はありふれた、だれの目にもとまる所で作っている。いわゆる雑草でさえ、そこに示される驚異と美しさはとうてい筆舌のよくなしうるところではない。要するにいわば行きずりの人の目の前で作られているのである。珍しい花は、人里離れた奥まった所で、この芸術家の幽玄な気分そのままに作られている。珍しい花を見つけることは、一段と厳粛な聖域に入るの思いを味わうことを意味する。嬉しさの中にも私は肅然とするものを感じるのである。」(春, No. 3)

「(前略)それまで私は植物や花のことはほとんど気にとめなかったが、今やあらゆる花に、あらゆる路傍の草木に、深く心をひかれる私であった。(中略)春になって、垣根の下から手当たり次第に摘んできた五、六種の草の俗名を、はたして幾人があげることができようか。私にとっては、花は偉大な解放の象徴であり、驚くべき覚醒の象徴であった。」(春, No. 9)

「昨日、私は、美しい古い邸宅へ通じるニレの並木道のそばを通った。木立と木立の間にはさまれた道は、一面に見わたす限り落葉でおおわれていた。まるで黄金色の絨毯であった。さらに進むと、落葉松ばかりの植え込みにでた。それは濃い黄金色に輝いており、ここかしこに点々と血のように真っ赤な色がみられたが、それはかりそめのまばゆいばかりの秋色に輝く若いブナの木であった。」(秋, No. 25)

その他、「海について」(夏, No. 1)、「夏の太陽について」(夏, No. 8)

2. 人生・人間関係

「人生というものはのびのびと生きがために生きてこそ人生といえるものであろうが、自分の今までの生涯はそんなものではなく、絶えざる心配にこづきまわされ通してきた生活であった。」(春, No. 1)

「しかし、考えてみれば人生が当時なんとか我慢すれば我慢できるものであったればこそ、私はこの長い年月をどうにか生き通してることができたのだ。人間というものは、必要に応じて自分を適応させるような驚くべき力をもっている。」(冬, No. 5)

「あれだけのことに堪ええたのも、要するに私が若かったからなのだ！30年

以前のことをふり返ると、なんと今日の私が哀れにも貧弱な人間に見えることか！」(春, No. 10)

「くる日もくる日も孤独と沈黙のうちに横たわりながら、自分の生活がそうであったことをありがたく思ったくらいだった。少なくともだれにも迷惑をかけていない。それだけでも大したことなのだ。」(秋, No. 5)

「私は今まで歩いてきた路をふり返ってみる。が、なんとつまらない人生行路だったことか。(中略)面をかくして見せない運命の命ずるままに、私はこの世に生まれ、小さな役割を演じ、そして再び沈黙の世界に帰ってゆくだけの話ではないか。」(秋, No. 23)

「今は、私の人生も完成した。(中略)時間と境遇と自分自身の性格が許す限りのことをやったのだ。私の最後のときがきた場合、私自身に関してもそういう風にありたいと思う。」(冬, No. 26)

3. 文学・読書

「書棚に新しい本を一冊おくと、『ぼくの読書する視力がつづくかぎりはそこに並んでいてくれ』と私はその本にむかっていうのである。そんなときは嬉しさのあまり体がぞくぞくする。」(春, No. 2)

「本当な意味で『読書』をする大衆というものが実に少数であることが分かる。たとえ翌日書籍の印刷が中止になったところで少しも痛痒を感じない大衆は実におびたしいのだ。(中略)どんな貴重な書物でもその多くのものは長い時間をかけてやっとわずかその数百部がはけるにすぎない。」(春, No. 22)

「われわれはときとして急に本が読みたくてたまらなくなることが、そんなときなぜかその理由が分からないこともあるし、おそらくはなにかほんのちょっとした暗示の結果によることもある。(中略)しかし、この頃では、心に浮かぶ本を手に入れようとしても大変な手数と時間がかかることが経験でだんだんと分かってきた。私は、長嘆息して、それをあきらめる。ああ、二度と読むことのない書物の数々！これらの書物は私に楽しみを、いやおそらくはそれ以上のなにかを与えてくれた。清らかな芳香を思い出の中に残してくれた。しかし、人生は永遠にその傍を通りすぎてしまった。私はもはや物思いにふけりさえすればいいのだ。おのずと書物の1つ1つが私の眼前に浮かんでくるからだ。物静かで心をしずめてくれる書物、高潔で心を激励してくれる書物、一度ではなく再三再四熟読玩味するにたる書物等々。」(秋, No. 2)

「ありふれたものに対するわれわれの見方が文学的な連想によっていかに影響されるか、ちょっと考えてみただけで思い半ばにすぎなものがある(中略)まさしく詩人は創造者にほかならないのだ。偏狭な人間の躑躅する感覚の世界をこえて、詩人は、自分自身の世界、あらゆる束縛を脱した精神のゆきかう世界を築きあげるのである。」(夏, No. 19)

「手にしていた本は詩集であつた。暖炉の火からさしてくる暖かい光線は、想像力にとみ、詩情の豊な人にいかに訴えるかのように、詩集のページを照らすのではないだろうか。」(冬, No. 2)

チャールズ・ラムの『続エリア随筆集』(*The Last Essays of Elia*, 1833)の中の「書物と読書についての断想」(“Detached Thoughts on Books and Reading”)に登場する「ぼろをまとった巨匠たち」(“ragged veterans”)のことに触れながら、次のように語っている。「自分の本よりも図書館から借りだした本で読んだ方が書物は読めるという人がいるのも私は知っている。たとえば、私は香をかいただけで自分の本の一冊一冊がすぐ分かるのである。(中略)その頃の私にとっては、金の意味は本を買うこと以外にはなかった。(中略)矢も楯もたまらぬほど欲しい本、肉体の糧よりもっと必要な本というものがあった。もちろん大英博物館にゆけば見るのができたが、それは自分のものとして、自分の書架上にその本をもつこととは全然別なことであった。(中略)よそから借りてきた本でよよりも、どんなにひどくても自分の本で読むほうが私ははるかに好きであった。」(春, No. 12)

4. シェイクスピア

『テンペスト』(1611)に触れながら、次のように語っている。

「しかし、ことシェイクスピアに関してはいつもそうであるが、もう一度読み返してみても、私の知識が案外完全でないのを知った次第である。いくらわれわれが長生きしようと、おそらくいつまでもそうかもしれない。われわれにページをくる力があり、それを読む心が残されている間は、そういうことは続くだろう。(中略)彼は言葉とたわむれており、言葉のもつ力の新しい発見を楽しんでいるかに見える。王者から乞食にいたるあらゆる階級、あらゆる心情の人間が彼の唇を通してものを語ってきた。(中略)われわれが驚異の念に欠けるところがあるとすれば、われわれの鑑賞に欠けるところがあるからである。1つの奇蹟がわれわれの眼前で行われているのに、われわれは注意らしい注意を払っていないといえる。われわれがじっくりと考えてみようともしない自然のいろいろな驚異と同じく、それはわれわれの心には慣れつ

こになってしまっているのである。(中略) 私がイギリスに生まれたことをありがたく思う多くの理由のうち、まずはじめに浮かぶ理由の1つは、シェイクスピアを母国語で読めるということである。彼を直接に知ることができず、ただ遠方から話しかけるのを聞き、それもこちらが一生懸命勉強して初めて生ける魂にふれることもできようという言葉で話すのをきく人間だと、かりに自分を想定してみると、私は背すじが寒くなるような絶望感、なんともいえない寂しさにひしひしと襲われる。」(夏, No. 27)

その他のシェイクスピアの引用は以下のとおりである。

「太陽の照り輝くすべてのところ 賢者にとりてはまさに幸ある港」(春, No. 2, 「リチャード二世」1幕3場 275-76行)

「尊敬, 愛情, 服従, 多くの友人」(秋, No. 5, 「マクベス」5幕3場 25行)

「汚れ果ていと恐ろしき毒気みつ」(冬, No. 4, 「ハムレット」2幕2場 315行)

「吹けよ, 吹けよ, 汝, 冬の風よ!」(「お気に召すまま」2幕7場 174行)

5. その他, さまざまな思いについて

人間の持つ知性の二つの形—春, No. 16.

戦争と平和, 徴兵制と軍事教練への反対論—春, No. 19, 夏, No. 7.

サントブーヴの「ポール・ロワイヤル」の読后感想—秋, No. 8.

ストア哲学, マルクス・アウレリウスについて—秋, No. 13.

瞑想と感動の関係について—秋, No. 5.

「苦しみと悲しみほど偉大な形而上学の教師はない」—秋, Nos. 10, 11.

イタリアについて—秋, No. 19.

歴史について—冬, No. 17.

科学についての偏見—冬, No. 18.

イギリス人の気質—冬, No. 20.

時間の貴重さ, 時間の経過の速さについて—冬, Nos. 24, 25.

お金・時間にまつわること—夏, No. 23, 冬, Nos. 1, 2.

孤独と友人について—春, Nos. 2, 3.

*引用はすべて, 平井正穂訳『ヘンリー・ライクロフトの私記』(岩波文庫, 昭和43年)からのものである。

『ライクロフト』に見る新たなる自己

But in this written gossip he revealed himself more intimately than in our conversation of the days gone by. (Preface, 20)

第1節 『ライクロフト』の位置付け

『ヘンリー・ライクロフトの私記』（以下、『ライクロフト』）は、日本でもある時期、アミエル (Henri-Frédéric Amiel, 1821-81) の『日記』、阿部次郎の『三太郎の日記』などとともに一般に広く読まれた。しかし、最近では以前ほど読まれなくなった。とは言え、ギッシング没後 100 年を記念してか、Amazon.com の新刊のコーナーを眺めると、新しい版の『ライクロフト』がアメリカで出版予定になっている。また日本では、翻訳書が再販されたり、新たに翻訳が出版されたりして、息の長いところをみせている。時代を反映してインターネット上では、各国のサイトに『ライクロフト』の原文全篇を、あるいは、「春」だけの部分の原文を載せている幾多のホームページが存在する。これだけでも十分に驚くに値することである。誰が読むとも分からないのに、ギッシングの作品の普及に努力している人がいることには頭がさがる。

過去の文学作品を読む時、一般に言えると思われるが、その作品の置かれている条件、社会的背景の変化などにより、その作品が書かれた当時とは異なった現代の読者の感受性に同化される可能性がある。その結果、『ライクロフト』の Phoenix 版の序文でセシル・チゾムも言っているように、その作品自体の持つ価値も変わってしまう恐れがある (Chisholm 11)。

すでに一定の評価を受けている作品であっても、この影響をある程度受けて、その作品本来の価値がわれわれ現代の読者にはわかりにくく、不透明になってしまうことがあるのではないかと思われる。

ギッシングは、生存中は、彼に批判的な同時代の人々の目には、およそ多義的な存在に映ったはずであり、また並外れた生き方をした。死後も、彼は多くの批評家の好意的な対象にはならなかった。彼の作品は、あまりに個人的で、世俗的なジャーナリズムだと、軽蔑され、その作品に持ち込んだ生活

臭を冷笑されてきた。!

ギッシングの多くの作品の中でも『ライクロフト』は、批評家から比較的好意的な扱いを受けてきている。古くはアイザック・ウォルトンの『釣魚大全』(Izaak Walton, *The Compleat Angler*, 1653), ギッシングも愛読したチャールズ・ラムの『エリア随筆集』(Charles Lamb, *Essays of Elia*, 1823), 100年前後では、ヘンリー・デイヴィッド・ソローの『森の生活』(Henry David Thoreau, *Walden*, 1854)などと共に一般大衆の支持を受け、よく読まれてきたと思われる。

『ライクロフト』の序文によれば、死んだ友人、ヘンリー・ライクロフトの遺稿を整理している間に、ギッシングは、偶然にこの作品の原稿を見つけ、それを編集し、出版するのである。そしてライクロフトという人物を通して、自分の思い付く率直な気持ちを述べる形式を取っている。これは、半ば生まれつきの、エドモンド・ゴスの言葉をかりれば、半ば「作られた小説家」ギッシングにとって、² 読者に自分自身を語りかけるのに最も自然な方法であった。同時に実人生において辛苦をなめた彼が自分の個人的な、自由気ままなユートピアになんとか入ることができた文学的な工夫であったのである。

そこにはイギリスのラム以来の、自分を突き放し、客観視することによって自らを認識するというエッセイの伝統が反映している。竹友藻風はその著の中で、「その形式は純然たるエッセイではなく、エッセイと区別せられる意味に於ける随筆、併も随筆の姿を借りて現はした小説の一種とも見るべきものであるが、エッセイの要素は極めて豊かである」と述べている。³つまり、『ライクロフト』は、虚構(fiction)と現実(fact)が微妙に交錯した小説と随筆との中間に位置する要素を備えた作品と言える。

『ヘンリー・ライクロフトの私記』を通して、ギッシングの現代での意味を検証し、この作品の魅力の一端に触れてみたい。

第2節 啓発と解放

全体は、春25篇、夏27篇、秋25篇、冬26篇、計103篇から成る作品である。ある日、突然、ライクロフトは遺産を受け継ぎ、都会を離れて、田舎の快適で小さな家に移り住むことになる。ギッシングは、実人生では絶えず金銭の苦勞をしつづけ、幸せであるはずの結婚生活にも夢破れ、挫折の人生を送った。それゆえ、貧しい人は依然貧しく、豊かな人は依然豊かであるという古くて新しい問題に、ギッシングは、もはや頭を悩まされなくてす

む。しかし、このことは彼にとって、一体どのような意味を持っているのであろうか。都会の雑踏、騒々しい世間から離れ、金銭の苦勞からも解放されて、ギッシングが、自分自身のためにできる最善のことは、自ら信じる方法によって静かで、穏やかな、内に秘めた自己啓発を実現することである。

この作品、『ヘンリー・ライクロフトの私記』は、ライクロフトという人物を通してのギッシングがその魂を解放した記録であると思われる。生まれながらにして経済的に恵まれ、優雅な生活を、幸福な自由を享受している人々への劣等感、羨望などから解放された男の姿を感じとることができる。

In my life; the life, that is, which had to be supported by anxious toil; the life which was not lived for living' sake, as all life should be, but under the goad of fear. The earning of money should be a means to an end [. . .]. ("Spring," Nos. 1, 25)

このように述べた後に、30年以上の間、お金を稼ぐことを目的そのものように考えて生きてきたと言っている。ほんの少しのお金がなかったために、ライクロフトは、悲しみと寂しさを幾度と無く味わい、貧しさのために、当然の権利として普通の人間が求める幸福や喜びを失っている。

それが今や手に入れた田舎家で落ち着いた生活をする喜びを率直に述べている。

The exquisite quiet of this room! I have been sitting in utter idleness, watching the sky, viewing the shape of golden sunlight upon the carpet, which changes as the minutes pass, letting my eye wander from one framed print to another, and along the ranks of my beloved books [. . .]. My house is perfect. ("Spring," Nos. 2, 27)

「この書があくまでギッシングの自叙伝であること、いささか修正を加えただけの自叙伝的随筆であることには変わりはない。一言でいえば、これはまさに彼の〈詩と真実〉であったのだ」と大塚幸男氏が述べている。⁴ このように、『ライクロフト』はひょっとしてギッシングの自叙伝ではないかと大半の読者は思われるかもしれない。

ギッシングの『ライクロフト』も、ラムの『エリア随筆』と同様に、自分の感情の捌け口であったらうと見ることができる。先程も述べたように、ギッシングにとって、『ライクロフト』は、自己啓発の表現とも言うべきものであったのである。人生の指標は、何も信仰だけに限ったものではない。徹底した自己の道を生きた人には、人それぞれの人生の指標があると思われ

る。「どこの世界にあっても、徹底して生きてみると、真理は同じではないか。」⁵ 人生の究極は、自己を見つめ習ってこの一生涯を生きることにある。

ロバート・シェイファーはギッシングが彼の小説で捕らえることができるよりも明確に「彼自身についての簡潔で、率直な啓示」“the revelation of a man” (Michaux 49) をわれわれに与えてくれたと述べている。

I had wrought sincerely, had done what time and circumstance and my own nature permitted. Even so may it be with me in my last hour. May I look back on life as a long task duly completed—a piece of biography; faulty enough, but good as I could make it. (“Winter,” Nos. 26, 220)

自分の運命、ひいては人間の運命一般を非難し、呪うということは、人生の苦悩や不幸が否定することができない現実である以上、当然の成り行きであるが、このような現実直面しながらも悲観的ではなく、楽観的な見方をすることも十分に有り得るわけである。すなわち、最後の勝利を信じて、現実がどんなにみじめであっても楽観的な態度を維持することができる。『ライクロフト』は、決して人生を諦めた、悲観的、消極的な作品ではない。一人ひとりの人間の存在は、厳しく孤独であるけれども、その根底にある魂(精神の原型)においては、われわれはひとつにつながっていると思われる。

ギッシングに『ライクロフト』を書かせたのは、自然の中に彼自身の芸術の、ひいては一人の人間として自己の存在の根源を見つけ出そうとする欲求であったと見られる。これが『ライクロフト』を支えているエネルギーの原動力であると言うことができる。すなわち、『ライクロフト』において、ギッシングはなにもものにも抑圧されることなく、のびのびと、不屈の精神と深く蓄積された真実の感情を自在に操る良識を得ることによって自己を実現したのである。

第 3 節 自然と自己

ライクロフトは、自然の美には極めて敏感であった。彼は、自然を賛美する美しい断章を『私記』の中に残している。全篇を通して流れている自然の息吹と季節感とは、われわれが『ライクロフト』を読むときに、一服の清涼剤になっている。彼は、太陽と自然とをととも愛した。彼は、会話があまりじょうずではなかった。そのために、彼は孤独で過ごすことが多かった。そして、都会の雑踏、人々のざわめきが嫌いであった。都市が決して彼に与える

ことがなかった心の平安と満足を自然の中での瞑想に見出したのである。ソロも『森の生活』(Walden, 1854)の中で、「人間は、自分の好機を自分自身の中に求めなければならない。これは真実だ。自然の日々はとてもおだやかで、人の怠惰を非難することもないだろう。ぼくは少なくとも自分の生活様式にある強みをもっていた。それは、社交とか、楽しみを外に求めなければならない人にくらべて、ぼくの場合は生活そのものが楽しみになっていて、いつでも新鮮さを失わないということだった。それはたくさんのシーンもち、けっして終わることのないドラマだった」と自然の中での生活の持つ利点を説いている。⁶『ライクロフト』の中でも自然についての有名な、珠玉の個所を次に2つ引用する。

Nature, the great Artist, makes her common flowers in the common view; no word in human language can express the marvel and the loveliness even of what we call the vulgarest weed, but these are fashioned under the gaze of every passer-by. The rare flower is shaped apart, in places secret, in the Artist's subtler mood, to find it is to enjoy the sense of admission to a holier precinct. Even in my gladness I am awed. ("Spring," Nos. 3, 29)

How many could give the familiar name of half a dozen plants plucked at random from beneath the hedge in springtime? To me, the flowers became symbolical of a great release, of a wonderful awakening. My eyes had all at once been opened; till then I had walked in darkness, yet knew it not. ("Spring," Nos. 4, 40)

平井正穂氏は、『ライクロフト』にとっての自然の持つ意義について次のように述べている。「われわれにとって、——イギリス人ならざるわれわれにとって、この『私記』がとくに印象に残る理由の1つは、この人物が感じている季節がわれわれの共感を呼ぶということではないであろうか。さまざまな意味での自然がイギリス文学の基本的主題の1つであることはいままでもないことであるが、この書物ほど、季節の移りかわりを繊細に顫動する心を通じてとらえている作品は少ないと私は思う。形而上的な、あるいは神秘的な含みをもたず、独特な詩情をともなう感覚的な風景としての対象にとけこむ人間の姿が、われわれの感慨をさそうのである。」⁷

第4節 メランコリー

隨筆という形式には、いわば一種出来合いの構造が備わっている。すなわち、それは時間的な推移である。文学的な隨筆は、単なる身辺雑記や日常茶飯事以上のものであり、とかく著者の自伝なり、或いは文学批評になる傾向が強いように思われる。この隨筆という形式は、著者個人を越えたもの（そして彼の自我と同一視されるようになったもの）である場合もあるし、また単に著者の人格と態度の一貫性である場合もある。⁸ほとんどの記載事項は、通常出来事が実際に起こった後に書かれているものである。そして、普通の隨筆に付き物の、いわばどうでもいような事柄が濾過され、対象が客体化されるのをじっくりと待つのである。このような場合、隨筆は一種の自己探求書に、時としては告白の書になる可能性を秘めていると思う。

ギッシングは、自分自身の情念に没入するのにも余念がない。従って彼は自分を他人の立場に置いてみることも、自分の周囲を客観的に眺めることも、共に器用であったとは言い難い。周囲の人々との間に軋轢が生じないまでも、協調性に欠けていた。彼は、他人への責任を十分に果たすことができず、ものの姿を、世間を歪めて見たのである。ライクロフトは、自分が他の連中とは違うことを意識する結果、自ら作った孤独の中に住む人間であり、「単にギッシングの自己憐憫の見事な事象⁹にすぎない点に『ライクロフト』の弱点があると言えるのではないか。ライクロフトもこのことに関して次のように述べている。

Let me tell myself the truth. Do I really believe that at any time of my life I have been the kind of man who merits affection? I think not. I have always been much too self-absorbed; too critical of all about me; too unreasonably proud. Such men as I live and die alone, however much in appearance accompanied. I do not repine at it; nay, lying day after day in solitude and silence. I have felt glad that it was so. At least I give no one trouble, and that is much. ("Autumn," Nos. 5, 135)

しかし、1世紀を経ても『ライクロフト』がわれわれに直接訴えるのは、色あせない普遍的な人間の感情、思いがそこに述べられているからである。戸川秋骨は、次のように『ライクロフト』を読んだ後の感想を述べている。

吾々はこの書に於て快い慰安となお近頃の言葉を以て言へば共鳴とを見出すのである。その春夏秋冬の四季に分って折々の感想なり、所論なり、経験な

り、観察なりを、書き記したその筆の跡に對して、少なくとも自分は一々頷かれるのである。必ずしも高遠の理想とか瞑想とかを説くのではないが、その言葉は一々胸にこたえる。¹⁰

ライクロフトは、われわれが日頃見なれていて、無意識に感じている言葉、事物、イメージなどをあらためてわれわれの眼にとめさせ、われわれの意識の中に深く刻みつけさせてくれるのである。現実とは違ったことがあり、そのことを作者もわれわれも知っていながら、当の現実とは違うものに共鳴することがある。それは、すなわち、われわれが一個の人間として自分の根幹を成すところに持っているものにつながるものをそこに見出す時、共鳴するということではないかと思われる。ライクロフトも次のように語っている。

The truths of life are not discovered by us. At moments unforeseen, some gracious influence descends upon the soul, touching it to an emotion which, we know, the mind transmutes into thought. This can happen only in a calm of the senses, a surrender of the whole being to passionless contemplation. ("Autumn," Nos. 5, 134)

ギッシングは、自分の生きていた時代を卑俗で、浅薄で、單純に自己満足してしまうような時代であると見ていた。さらに、彼は、その時代を自分の古典的な古めかしい考え方から導き出した基準で判断したのである。彼は、張り詰めた感受性からくる苦悩を貧しい教養のない人々の責任にする一方で、経済的に苦しい彼らの環境を改善し、彼らに教養を身に付けさせることに心を砕いていた。彼は、知的自己と社会的自己とのギャップにもがいていた。このような影響から、彼は、いつも自分の境遇の重圧にあえぐ者たちを描く傾向がある。

ギッシングは、彼自身も、いわば社会からドロップアウトされた者で、人に顧みられることの少ないところにいる身である。彼の描く主人公たちは、有産階級の知識人であり、労働者階級出身の教養人であり、その才能から判断して当然いてもおかしくないところから追われた男女である。才能が汚れないところですら、何か忌まわしい機会が精神の成長の発達を妨げようとすることがある。彼は、自分の作品の登場人物及び読者に、運命が操る人形としてではなく、自ら考え、自らの自由意志で物事を決定し、行動することと自らの精神を培うことを求めるのである。

I am told that their semi-education will be integrated. We are in a transition stage between the bad old times when only a few had academic privileges, and that happy future which will see all men liberally instructed. Unfortunately for this argument, education is a thing of which only the few are capable; teach as you will, only a small percentage will profit by your most zealous energy. On an ungenerous soil it is vain to look for rich crops. Your average mortal will be your average mortal still [. . .]. ("Spring," Nos. 12, 69-70)

ギッシングの晩年に、何かと彼に気を配ったと言われる友人、H・G・ウェルズは、彼自身と同時代の人々との姿を生き生きと伝えている『自伝の試み』(*Experiment in Autobiography*, 1934)の中で、ギッシングの悲観的なものの見方の持つ欠点について次のように指摘している。

Perhaps Gissing was made to be hunted by Fate. He never turned and fought. He always hid or fled [. . .]. He was a pessimistic writer. He spent his big fine brain depreciating life, because he would not and perhaps could not look life squarely in the eye—neither his circumstances nor the conventions about him nor the adverse things about him nor the limitations of his personal character. (Michaux 39)

ルグイとカザミアン共著の『英文学史』(*Histoire de la littérature anglaise*, 1924)によれば、¹¹ギッシングは、ディケンズと同様に、早くから社会的な苦しみの刻印を押され、青年時代に最も苛烈な試練を体験する。苦渋が彼の性質の根底に沈殿し、彼のあらゆる神経に染み込んで、彼の想像力そのものになった。ギッシングには、ディケンズが持ち続けた明るい陽気さが欠けていたことも憂鬱さの大きな要因であった。又、彼の時代の雰囲気も、彼の精神的な傾向をペシミズムへ向かわせた要因の1つである。彼は、ショーペンハウアーの息吹を呼吸し、それをわがものとした。科学を信奉していた作家たちを手本として、彼は、自己のリアリズムを強化したのである。彼が『ライクロフト』を書いたのは、貧困の状態からすっかり抜け出し、作家としての評価もある程度定まった頃である。それにもかかわらず、人生の早い段階で大変な苦悩を味わったがために、ギッシングは、作家としての成功をもってしても、自分自身に対する姿勢も、人生に対する姿勢も変えることが容易ではなかったのである。これは、致し方ないことである。

「芸術が人生を模倣するよりも、はるかに人生が芸術を模倣する」と言ったワイルドの有名な逆説は、¹²彼と同時代のギッシングの人生に如実に表出したのではないか。ギッシングは、小説家として夢見た役割と状況を自ら演じる

傾向があった。彼は、自分自身を作品の中に書き、人生から芸術を作り出したのである。そして、彼は自分の実人生に自分の作品からの作り事を再現することで人生に芸術を還元した。作家の真の仕事が実人生を反映した虚構の世界を作り出すことであるならば、彼はまさにそれを果たしたと言えるだろう。

第5節 共鳴者としての役割

「ジョージ・ギッシングは、嫌々小説形式を受け入れ、その嫌いな形式で二流の名声を得たのである。ギッシングの作品には、彼の好みと小説形式を受け入れなければならなかった運命との葛藤が見られる。その結果、彼の文体は（当然、一般的な概念を扱う学者の文体となっているが）明らかに良いものではなかった」と J・M・マリーが言っているように、¹³ ギッシングは、とても不完全で、幅の狭い、小さなキャンバスに数少ない色彩で描く二流の作家であった。

ギッシングは、確かに不完全ではあるが、完全な作家が与えることができないものを『ライクロフト』によってわれわれ読者に与えていると思う。

読者は、ライクロフトとともに、そしてギッシングとともに考え、その経験を共有するとき、自分を再発見し、自分を取り戻すことができる。『ライクロフト』は、孤独な者の打ち明け相手であり、慰め相手であり、先生である。われわれのものと姿を取り戻させ、混乱から明晰へ、動揺から平静へ、分散から自己把握へ、偶然なものから永続的なものへとわれわれを導いてくれるのである。

「彼の洗練されていない文体よりもはるかに重大な欠点は、彼の経験の範囲の狭さである」と G・オーウェルが述べているが、¹⁴ ギッシングの経験の幅、世界観の狭さ、ナイーブ過ぎる感覚、粗雑な点などを責めることは容易である。しかし、「人間の精神を信じ、作中人物に思索せしめる極めて稀に見る作家である」と言う V・ウルフの言葉を簡単に無視することはできないであろう。¹⁵

ギッシングの場合、自分の経験を難解な観念や哲学上の課題などの形で示すのではなく、1つの体験として表している。彼の経験が身近な体験として与えられるからこそ、われわれは、その経験を個人自らのうちに取り込み、そこで自分自身の思想を形づくるのが可能になるのであろう。それゆえ、その体験が自分自身の体験と重なり、われわれ個人の人間性を豊かにしてく

れるのではないかと思われる。

恐らく、ギッシングを支持する人々は、社会的な存在としての自分が現実の社会にどのように対処すべきかを小説なり、随筆の中に見出すことができない、または満たすことができない人々であろう。しかし、ギッシングの強い自我意識の裏に潜んでいる虚無感にわれわれは注意しなければならない。また、ライクロフトの態度は、自己の生活活動を限定し、あくまで自分の身をわきまえ、その範囲内において生きようとするものである。こうした虚無感、消極的な生活態度は、われわれを引き付ける反面、われわれに嫌悪感を抱かせる要因になっていると思われる。彼は、景色を眺めていても、太陽を眺めていても、すぐにそれを自分の心の反映として、自分の中にひきずりこみ、自分の心を語る傾向があるので、結局は憂鬱で重苦しい彼の居間へと、われわれをひきずりこむことになる。

A man's life can be so brief and so vain? Idly would I persuade myself that life, in the true sense, is only now beginning; that the time of sweat and fear was not life at all, and it now only depends upon my will to lead a worthy existence. ("Autumn," Nos. 23, 169)

I can look back upon its completed course, and what a little thing! I am tempted to laugh; I hold myself within the limit of a smile. ("Autumn," Nos. 23, 169)

Destiny with the hidden face decreed that I should come into being, play my little part, and pass again into silence. ("Autumn," Nos. 23, 170)

われわれが『ライクロフト』で見出すことは、もちろん、俗悪な人生の側面ではなく、共鳴音としての人生なのである。われわれは、どんなに矮小であろうとも、より微妙な、より個人的な生活にも関心があると思う。自分の心情を吐露する個人に言うべきことがあり、その人がそれを適切に言い、そこに独特な個性の啓示が現れているとき、われわれにとってこれほど興味のあることは他にあるであろうか。

「じっさい、作家がわれわれにとって貴重であり、必要であるのは、作家が自分の心の内的なはたらき、もちろんそのはたらきが新しく以前にだれもやっていない場合にそのはたらきを、われわれに示してくれるかぎりにおいてである。作家が何を書こうと、劇でも学術的著述でも短篇小説でも哲学の論文でも叙情詩でも批評でも風刺詩でも、その作家の作品の中でわれわれに貴重なものは、ただその人の心の内的なはたらきだけであって、た

いていの場合に、いや私の考えではあらゆる場合に、形をゆがめながら自分の思想感情を中に盛っている建築的な構造物ではない」と語るトルストイのアミエルに対する賛辞は、¹⁶ギッシングにも当てはまるのではないかと思う。われわれ、読者は、この『ライクロフト』を読み、この本の扉を閉じたとき、再び戻って来る現実を、自分の経験や感覚を超えた新たな主体として生きるきっかけを手にするようになるのである。

註

この論文は、「ライクロフトに見る自己実現」『湘南英語英文学研究』第16巻第6号(1985)に修正・加筆したものである。テキストはGeorge Gissing, *The Private Papers of Henry Ryecroft* (London: Phoenix House, 1953)を使用した¹が、Paul Elmer Moreの序文があるModern Library版も参考にした。翻訳には岩波文庫(昭和43年)の平井正穂訳と新潮文庫(昭和42年)の中西信太郎訳を参照した。

- 1 Walter Allen は、*The English Novel* (Aylesbury: Pelican, 1973)の中で、“He is one of those imperfect artists whose work inevitably leads one back to the writer in person. His fiction is not, except in perhaps three instances, sufficiently detached from its creator; it is too personal, the powerful expression, one cannot help feeling, of a grudge.” (287)と批判している。
- 2 Edmund Gosse, *Leaves and Fruit* (London: Heinemann, 1927) 277.
- 3 竹友藻風『エッセイとエッセイスト』(北文館, 1927) 290.
- 4 大塚幸男『閑適抄』(第三書房, 1975) 199.
- 5 松原哲明『自己をなろう旅』(佼成出版社, 1988) 2.
- 6 ソロー『森の生活』(真崎義博訳, JICC 出版局, 1981) 86.
- 7 『ヘンリ・ライクロフトの私記』(平井正穂訳)「解説」292.
- 8 Northrop Frye, *Anatomy of Criticism* (Princeton: Princeton UP, 1973) 307.
- 9 Walter Allen, *The English Novel* (Aylesbury: Pelican, 1973) 291.
- 10 大塚幸男 190.
- 11 大塚幸男 196.
- 12 オスカー・ワイルド『虚言の衰退』(吉田正俊訳, 研究社, 1968) 47.
- 13 J. Middleton Murry, *The Problem of Style* (London: Oxford UP, 1973) 44.
- 14 Sonia Orwell and Ian Angus, eds., *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, vol. 4 (Harmondsworth: Penguin, 1980) 491.
- 15 Virginia Woolf, *The Common Reader*, 2nd. ser. (London: Hogarth, 1974) 223.
- 16 アミエル『人生について: 日記抄』(土居寛之訳, 白水社, 1973) 267.

(加藤憲明)